

小田原史談

第72号

発行所 小田原史談会
小田原市西栢山3310

伊勢新九郎 (北条早雲)

備中出身説を探る

立木 望 隆

北条早雲(実名伊勢新九郎)が伊勢の国の出で、同国関氏の一族或は一介の素浪人から成り上った人物である、という世評が一般に流布されるようになったのは、ごく近々明治末から大正へかけてのことである。

ここに至った理由はいくつか挙げられるが要約すると次の三点に示される。その一は、相州兵乱記その他の文献に「早雲は伊勢の国(伊沢)の出」と記されている。その二は、早雲の実名が伊勢新九郎といふところから、安易に伊勢の出と結びつけられた。その三は、明治時代の中葉に、旧越前藩山藩主であった小笠原家の文書の中か

ら早雲の自筆書状が何点か発見され、その一つ永正三年九月廿一日付手紙の冒頭に「関右馬亮方この名字我ら一躰に候、伊勢関と申所に在国により関と名乗り候云々」とある。この文面を当時史学の權威であった田中義成らが問題として論争をまき起し、結論的に述べればさきのような世評を生む直接のきっかけをつけたのである。そこで以上重要な二点に

ついで検討してみよう。まず文献を表にしてみると、(左表参照)以上、年代の古い代表的な著書だけを取りあげてみたが、これとわかるように大半が備中説である。もつとも今川記など、記事の後半に伊勢よりとあるが、これは応仁の乱に際し足利義視が伊勢の北畠氏へ難を避けたその供として早雲を従い、一年後にかねはそこの地を義視に致任している。そこで以上重要な二点に

文献名	成立年代	生国	家号
今川記	一五三三(天文二)	備中	伊勢氏
北条記	一五九〇(一六〇〇?)	備中	〃
北条五代記	一六一四(慶長一九)	山城うじ	〃
中国兵乱記	一六一五(元和一)	備中	〃
南庵太閤記	一六二五(寛永二)	備中	〃
相州兵乱記	江戸時代 中期以降?	伊勢	〃

れを順序不同で書いて、いるのであって、生国説と混同するのはいやまちである。相州兵乱記その他時代を下った文献は多く、これを無批判に取り入れてみるとみ

次に小笠原家文書の内容である。ここで指摘したいのは田中義成が関右馬亮の家系をのっけから伊勢亀山に拠った名族関氏(当時は関盛貞何以斎)の一族と誤解していた点である。概略すれば関右馬亮春光の祖父盛春という人物は、豊前国金田庄の地頭、国乱に際し他国に流浪し、文安五年(一四四八)に兩信の村松氏に身を拠せ同地月差に城を持ったのが始と伝え伊勢の関氏の一族だと私称していたにすぎない家柄であった。

当時、早雲じしんも関右馬亮のこうした事情は知らず、通俗的に伊勢の関氏に同族と思ひ込むと共に、守護小笠原左衛門佐の有力な被官の一人として重視しそこで「自家の先祖と関家の先祖は、共に季衡流伊勢氏系の盛光(伊勢氏の祖)と盛国(関氏の祖)兄弟から出た根本兄弟より相分れし家である」と親近の情をこめて書いた、たぶん外交辞令的な文章であると解

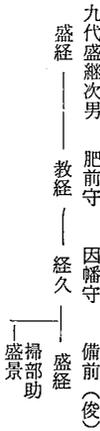
釈すべきものであった。このようにして問題を分解してみると、早雲の伊勢出身説はまったく根拠の薄弱なものにすぎないといふことがわかる。「北条五代記」の山城うじ説はのちの「北条盛衰記」にも影響をあたえたと思われるが、拙著北条早雲素生考に詳述してあるので省略したい。

早雲の備中(岡山県)出身説は文献でみた通りはやくから唱えられていたにもかかわらず、内容に具体性を欠いていたことと、遠隔であるということ、積極的調査をすすめようとしない者がいなかっただ等、しだいに影をひそめる結果になったと思われる。戦後の昭和三十一年に岡山大学の藤井教授が、同大早雲と備中在原庄」と題した論文を発表した。備中上早雲の関係を近代史学の上で取り上げたいしよの論文ともいうべきものである。藤井氏の論文を概略紹介すると、その一つは「中国兵乱期」「備中府志」等に収録された在原庄(後月・小田両郡に亘る)に於ける伊勢氏の消長を描き、ついで伊勢因幡人達が領内に建立した祥雲寺、その子孫が

建てた法泉寺等の記録、文書等を紹介して備中伊勢氏とそれに連なる新九郎父子の位置を印象づけ、つぎにこれらを実証すべく第一級史料と目される室町幕府の根本史料たる「蔭涼軒目録」に注目し、ついで文明十七年(一四八五)九月三日の条以降十一月廿五日の条に至るまでの間を記録された、備中祥雲寺の訴訟事件の記事を発見、そこから新九郎と在原庄の密着した関係を抽出した。そしてこの新九郎は、幕府の御番帳長禄二年以来申次記に載す「伊勢新九郎盛時文明十五年十月十一日、被召加之。備中守貞定息也」とある人物と同一人であることを指摘し、この新九郎盛時こそその北条早雲であると論じたのである。詳細は同論文を参照されたいが、私が岡山県井原市を採訪するきっかけも勿論この論文を足がかりにしていることであつた。私はまず藤井氏の論文中備中祥雲寺を建立した伊勢因幡入道なる人物を伊勢系図の何処に求めるかが先決であり問題解決の基本になるものとして、さいわい藤井氏が発見された「蔭涼軒目録」中の祥雲寺訴訟事件で幕府問注所に提出した伊勢新九郎盛時の覚え書に書

かれた人物、これを系図に
 復原し従来の伊勢系図と照
 合して、はたして該当する
 ものがあるか否かを試みる
 ことにした。新九郎の覚
 書は「前文略……今御乳渡
 之掃部助、新九郎兩人の曾
 父因幡入道始建立祥雲、
 分領内寄附千寺家、祖父代
 惣庄半分充割分干兄弟、以
 故於祥雲寺云々後略」とあ
 る。以上の人物を系図に直
 すと

因幡入道 — 新九郎
 — 掃部助
 となる、これを季衡流伊勢系図に探ねると正しく該当
 する次の系図を見出した。



すなわち新九郎が述べる
 所の因幡入道は因幡守経久
 のことであり、そのあとは
 法泉寺を建立した祖父の盛
 経(法泉寺ニ文書アリ)盛経
 以下は新九郎の父備中守盛
 定(尊卑分脈伊勢系図)と
 なって、ここに系図の上か
 らでは新九郎早雲は正しく
 備中伊勢氏系の人物である
 ことが確認されたのである

いま備中在原庄(岡山県
 井原町)を訊ねると、伊勢
 氏の拠った高越山城(東江
 原町)が往時のまま現存す
 るのをはじめとして、因幡
 入道が建立した祥雲寺(現
 宮地ノ正雲寺)新左衛門
 (盛経カ)が建てた新九郎盛
 時が改築した法泉寺(西江
 原町長谷)等の施設、文書
 では法泉寺(盛経・盛定・
 盛頼・細川氏久・盛時の禁
 れらの資料は一体何を物語

るものであろうか。早雲と
 小田原北条氏に対する土地
 の人々の異様なほどの執念
 が訪れるたびに強く迫って
 くる。
 なお小田原北条氏が滅び
 てから起った顕著な史実で
 は、高越城からほど遠から
 ぬ笠岡市山口の北条家から
 豊臣秀吉が北条氏直に宛て
 た五箇条の宣戦布告状ほか
 関係史料が小田原市立病院
 長北条龍彦氏の手によって
 近年発見された事実(「わ
 が先祖の謎をさぐる」北条
 竜彦著)もある。
 さいに、もう一つ紹介し
 たいのは、北条早雲が伊豆
 の修善寺から備中の法泉寺
 へ送ったと伝える「スリゲ
 サ」の問題を追求している
 ことである。
 早雲が駿河の今川家に現

われるのは、文明八年(一
 四七六)今川義忠が戦死し
 たあと起こった「家督紛争
 」の渦中である。ところが
 その際早雲の妹で義忠夫人
 であった北川殿が竜王丸を
 連れて通がれた先が山西(一
 焼津市)の小川法永の館で
 あった。その理由がわから
 なかった。
 ところがスリゲサ問題を
 追求しているうちに、備中
 矢掛の洞松寺で文安五年に
 十二歳で出家得度した、備
 中平氏出身の賢仲繁哲禪師
 が文明三年に山西の小川に
 法永長者の要請で林叟院を
 開山した事実を突止めた。
 (「林叟院五百年史」洞松
 寺記、日本洞上連灯録)今
 川事件の五年前である。
 文安五年といえれば私は備
 中伊勢氏が新九郎の父盛定

街道筋の助郷と其の変遷

(一) 戦国時代より江戸時代迄の幾変遷

敏なる行動により、主君の
 敵明智を打ち取るべく東上
 し、前橋城に居た滝川一益
 は関東管領職として、小田
 原城主北条氏に対し一撃を
 加へ、上州より上田城主真
 田昌幸等の見送りを得て西
 上したが、何を考へたか秀
 吉の軍に投ぜず、北伊勢の
 長嶋城の入城した。
 其の時攻め上った秀吉は
 先づ大阪城に信長の子信孝
 と会し、山崎に向った。徳
 川家康は、此の変事を聞く
 や、伊勢の伊賀衆に助けら
 れて、三重より海路を本国
 岡崎城に逃げ帰ったのであ
 った。
 かくして秀吉等は明智方
 の軍勢を打ら破って、京師
 に平穏を取り戻したのであ
 った。
 天下は一時秀吉の意見に
 随って正統織田三法師丸を
 立て、旧来の老臣達と共に
 天下を治め様としたが、此
 処に関東の豪勇小田原城主
 北条氏直が其の意に反し、
 秀吉如き者と言う考へから
 どうしても上京して来なか
 ったのであった。秀吉は小
 田原城主の為に相当の意を
 つくしたが、ついに上田城
 主の真田氏と北条氏とが上
 野に於て沼田奈奈桃両城に
 関する事件を起したので、
 此の事件を真田昌幸から秀
 吉に訴へて来たので、この
 事件が動機となって、小田
 原城主に対して非常なる文
 書を送ったが、小田原城主
 としては、その都度上京も
 せず、あれこれと言葉をか
 わしては、上京下に延引
 わし、一方では城下に指令を
 発して、着々と我が城下に
 於ける城の構築等に狂奔し

加藤 誠 夫

ていたのであった。業をにやした豊臣秀吉は徳川家康、蒲生氏郷等と計画を練った末ついに小田原城の攻略に踏み切ったのであった。

この事態の発生は、我が相模に住んで居る住民等の一大転機に立たされた時季であった。

豊臣秀吉は先づ、天正十八年三月より四月にかけて西方の大軍を小田原へ小田原へと進撃せしめるのであった。

一方小田原城側に於ては父氏政、城主氏直他近親、重臣松田尾張守憲秀等は相談の末籠城戦に一決し、其の年の四月にはついに秀吉始め家臣の面々が早川の山頂、石垣山に築城し、小田原城の包囲態勢を取り、秀吉自ら全軍の指揮をしたのであった。

方五里の大城を誇る小田原城を総勢にて取り囲み所々に於て大撃戦が展開した。ここに於て、さしもの堅城だった小田原城の城主は其の家臣と頼む松田憲秀の裏切りに端を発し、北条氏政は弟氏照と共に市内南町にあった侍医田村安齊の屋敷で切腹し、北条早雲以来の名家は五代にしてはかなくも滅亡してしまつた。実に天正十八年七月の落

城であった。

この時秀吉は小田原城其の後の処置として、徳川家康には北条氏の所領の地関東一円を与へ、家康は更にこの足柄地方を含めて其の家臣大久保七郎左衛門忠世に与へたので、忠世は始めて小田原城四万五千石の城主として入城したのであった

しかし大阪城に帰陣した豊臣秀吉は、早速天正十九年に檢地の命令を発令して田畠の調査を作成せしめた。これが天正檢地の御水帳であった。

その後明治四年には廃藩置県となり、封建時代下に

(二)街道に宿駅等を設定された

徳川幕府は其の政策の一環として、街道の設定を行なったのであったが、其の街道とは第一級クラスの公道として、東海道、中仙道、甲州街道、日光街道、奥州街道を選んで、此れを五街道と呼び、当時の主要幹線として大いに利用されて

たのである。又、此の他の重要路線としては、伊勢路、中国路、長崎路、北国街道、水戸街道があり、尚此の他の往還は脇往還と呼んでいた。

慶長六年(一六〇一)になつて、先づ東海道の宿駅を設定して、それからは次

あること二百八十年の間

其の領主も色々と変つた。其の変遷は次の通りであつた。

初代の小田原城主大久保忠世以来二十四年にして、第一期番城時代となり、この間四ヶ年にして、阿部氏の時代となり、六年後には第二期番城時代があつて、九ヶ年目、稲葉氏が小田原城主となり、三代五十三年間の後、更に後期大久保氏の小田原城主時代になつて、百八十五年間を保全して、ついに明治維新を迎えたのであつた。

々と前記五街道その他にも宿駅を設定整備して、ついに全国的に此の様な宿場が設置されたので、小田原宿道の宿場町として大いに発展したのであつた。

此の五街道の宿場の数は東海道が五十三宿、中仙道は六十九宿、甲州街道が三十四宿、日光街道が二十四宿、奥州街道は六十九宿となつていたのである。

各街道の内、主として東海道を例にとれば、東海道としては、其の起点は江戸日本橋を最初の宿として、京都の三条大橋迄を五十三

次と呼ぶ。

この五十三次の旅は、十返舎一九の「弥次喜多」によつて天下に有名であるがこの道中は、昔は参勤交替の大名達にとっては憂きつらい旅路であつたらしい、今でも日本橋の中央に道路元標がある。其の里程は、凡そ百二十九里二十三町で、其の当時の大人一人の足では一日に平均十里余として約十三日間の行程だが、其の間には、箱根山の難所があり、しかも関所が設けてあるし、浜名湖の西岸の荒居(今切)にも関所があり、これらの関所では、最きびしい御取り調べがあつた。

又各河川には橋がなく、増水の時の川留めは、幾日にもなつたことがあつたし、更に熱田の宮より桑名の間を「七里の渡し」といつて

此処では海を船便で交通するといつた具合で、全く当時の旅行者の難儀といつたら非常に厳しいものであつた。

此れ等上下する旅人達の荷物の運送や、旅人が通行上必要なものは、人足と馬で

此れ等の為の各宿駅の伝馬については、小田原北条時代に於てさえずりに、助人馬と呼ばれた課役があつて、江戸時代よりも前に、慶長六、七年(一六〇一、一六〇二)の頃には最早行なはれていたようである。新篇相模風土記稿にある通り、慶長六年と記されて

曾我原の中村氏の由来

内田 武雄

(つづく)

中村氏の家系を略記すれば鎮守府將軍村岡五郎良文の七世の孫兵衛太郎恒祐始めて曾我に仕え、其の子曾我太右衛門祐信と称す。其の子曾我太右衛門祐信と祐信の六世左衛門尉助、足利尊氏に仕え其の子兵庫助次其の子美濃守満助、将

軍義満に仕え、永和四年軍功に依りて偏諱の一字を賜り、且周防国田保の庄安堵の判物を給ふ、其の子平次左衛門政助は、足利義尚に義將、義量に仕えて京師に仕す、其の子教助將軍義教の偏諱を給わる、子兵庫助元助、弟平太祐定は本國に

此れ等上下する旅人達の荷物の運送や、旅人が通行上必要なものは、人足と馬で

此れ等の為の各宿駅の伝馬については、小田原北条時代に於てさえずりに、助人馬と呼ばれた課役があつて、江戸時代よりも前に、慶長六、七年(一六〇一、一六〇二)の頃には最早行なはれていたようである。新篇相模風土記稿にある通り、慶長六年と記されて

又天正十八年に豊太閤より郷中安堵の制札その外太閤殿下よりの御墨附も給わつたと言ふが心ない学者さんに借して失なつたとのことである。

又当時の下馬とはつた大きな石などあつたと言ふ人もあるが、今では家人は何もわからなかつた、先日私がたずねた時に話して下さつた。しかし曾我氏の初代と言われている祐家と言ふ人物は伊豆の狩野氏の出で狩野家次の次男祐家である。曾我氏はやはり伊豆の狩野氏

帰り曾我に仕し天文七年六月五日卒す、是を中村氏の祖と言ふ、子祐久多聞亮と稱し、子祐之を生み天正十二年二月朔日卒、祐之の子平次左衛門彌助養子多聞亮祐良の時村を中村と改める祐良は中村の豪族林三郎右衛門越智正信の二男なり。

曾我を始め近郷十五村の大庄屋であつた。天正十八年小田原北条役終りて豊太閤殿下が中村氏の屋敷に一宿された時、おれは尾張の中村の出である今日より中村姓を名のるがよい、家紋も豊臣家の家紋である五七桐を給わつたと言われている。今でも中村家の家紋は五七の桐を使っている。

又天正十八年に豊太閤より郷中安堵の制札その外太閤殿下よりの御墨附も給わつたと言ふが心ない学者さんに借して失なつたとのことである。

の出である。静岡新聞社発行のふるさとの百話に出てくるのを見て明らかである。

道祖神と御祭りについて(上)

神田 太郎 吉

曾我近郷の道祖神の祭りは大体どこでも同じである。我が家の近所に...

九時頃には火を消して家に帰ります。十四日には学校より帰り皆道祖神の小屋の前で、さいと払い(土地に依ってはいんど焼きと云う)の仕度大人も四、五人手伝って小屋を壊して...

今を去ること三百有余年前北条時代の頃、美濃の国から小田原に移住したので美濃屋其の主人吉兵衛の門口に、威勢のいい一人の、魚屋が旦那相変らずの御機嫌で、どうでしょう、御覧のとおり鳥賊大漁—安くしときますから、思いきって、みんな買ってください、と、どなり込んで来た、時に吉兵衛さん、大酒呑みで、財産を傾け、一家の生活に困窮していましたが、大酒呑の心理で、そんなことはお構いなし、相変らずのんべんくらりと、やって来た時でありましたから、酒の勢も手伝って、『よし置とけ、置とけ』と、相機灘を一本にたけように、大きく出たが、さて酔がさめて、山の様な鳥賊を見ると、さすがの吉兵衛さんもびびりぎょうてんしてしまっただけれどもさすがは美濃か...

小田原名物塩辛の元祖

額田 喜代 春

我が家の近所に、曾我近郷の道祖神の祭りは大体どこでも同じである。我が家の近所に...

当りて、次第にその名が、喧伝されるようになったそうです。今では小田原名物となり酒の肴となり、一般に御飯の惣菜となり、温かい好まれればよいお土産として、喜ばれて居ります。益々此の小田原名物が発展することを祈るものであります。(元小田原駅助役)

☆ 雑記

◇八月二十日午後二時より真言宗東寺派金子殿明寺において古文書、宝物の展示があり、会長出席する。はじめ承久三年(一二二一)松田の山頂に在り(西明寺)文明二年(一四七〇)現在地に移り、寺を如意山蓮花王院殿明寺とあらためる。本尊は不動明王。

☆ 史蹟めぐり

武田源氏発祥の地(山梨県韮崎市)武田の里を訪れた。新羅三郎義光より四代目にあたる信義が初めてこの里に館し、以後武田氏と称したところ。尚武田源氏最後の勝頼は、織田・徳川のために田野(天目山)に自害、そのときの夫人はわが北條氏の出。